

---

# Story of My Life.

火桜芙蓉

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Story of My Life .

### 【Nコード】

N7509Z

### 【作者名】

火桜芙蓉

### 【あらすじ】

平穏な日常を望んでいた久遠零次。だが、その日常はかくも簡単に崩れ去る。街に現れる切り裂き魔、その邂逅から日常の歯車は狂い始める。そして来る12月25日、聖誕祭のこの日に、戦いの火蓋は切って落とされる。想いと願いは力になる。……これは、大切な人を守る物語。

いつも通りは変わらない。(前書き)

という訳で始まりました、Story of My Life.  
今回はバトルと中二成分をたっぷり頑張ろうと思います。

実はこれの前にもう一話あったんですが、それが諸事情で吹っ飛びまして。

まあ序章ってことで語りだけだったので、問題は無いんですが。

では、稚拙な作者ではありますが、頑張ります!!

どろぞろ!!

いつも通りは変わらない。

12月20日。天蓮市。てんれんし

「ほら、起きてよ。はじめちゃん」

一人の女の子が、ベッドに居る男の子を起こそうとしていた。

「んあ、しず、くか……。後五分……」

だが、その男は布団をかぶってなかなか出てこない。

「まったくー。こんな美少女が二人も揃って起きないなんてー。しようがない、これを使うか」

ベッドの横に居たもう一人の黒髪で少し長めの少女が、何かを取り出す。

「……やかん？」

それは、どこからどう見てもやかんだった。

ただ、やかんの口からは湯気が出ている。

「じゃあ、約80度のお湯をこの馬鹿にぶっかけます」

「待て」

思わず布団から飛び起きる俺。

「ちっ、おいしい」

「おい、本気で悔しがるな」

「そこまで本気になることも無かったでしょ」

そう、普通の常識を持った人ならそう言ってくれるだろう。

だが、このやかんを持った女は違う。

一回本当にお湯をぶっかけた前科を持つ女なんだ。

……あの時は布団で蒸し焼きにされるところだった。

「お前は知らないから……」  
ふう、と思わず溜息をつく。

「……？ とーにーかーく、朝ごはん早く食べないと、遅刻するよ」  
「？」

最初に起こそうとしてくれた女子は、エプロンを着ていた。

そう、これがいつもの日常。

俺の名前はみまもり はじめ崎守零次。

特に語ることも無いだろ。

エプロンを着た彼女はつきのおせし月之瀬雫。  
いつも俺の世話を焼いてくれる幼馴染だ。

「まったくこの幸せ者が。私達に感謝しろよ」

毒を振りまく小つこい黒髪みじつ あやめのやかん少女は御堂綾女。  
まあ、悪友というか、腐れ縁というか。幼馴染ではあるが。

あともう一人は

。

「よっ！！ 飯食いにきたぜ」

と、ジャージで俺の部屋を開けて入ってくる男が一人。

こいつの名前はおぼろひそつ朧火霜。

いつも通り朝のランニングを終えて帰ってきたようだ。

スポーツ万能、成績優秀、な化物男。

だが何故か俺の幼馴染だ。

こうしてひとつのテーブルを四人で囲むのがいつもの朝食風景。

俺達四人はアパート『かたりぐさ語草』に住んでいる。

俺は101、朧火が102、月之瀬が201、御堂が202で、俺の部屋に集まってご飯を食べる。

アパートの設計上、俺の部屋が大きくなっているらしい。

だから、皆で集まって食事をするにしているのだ。

月之瀬が俺の部屋で料理を作り、御堂が俺を起こし（たまに月之瀬も手伝うが）、朧火は一緒に食いに来る。

はい、俺は寝ています。

「じゃ、食べるよー」

月之瀬が手を合わせる。

『いただきます』

全員で手を合わせて、食べ物に感謝する。

相変わらず月之瀬の作る料理は美味しい。

「もうすぐクリスマスだが、何か予定でもある奴らはいるか？」  
いきなり臙火が聞く。

「どうせ今年も四人で祝うだけだろ」  
俺はいつも通りの答えを返す。

「まるで私達がつまらないみたいない言い方ね」  
「憤慨だよ！！」

俺の言葉に御堂と月之瀬が反応した。

特にそんな気も無かったが……。  
まあ、毎日顔合わせてるからあんま変わんねえんだよな。

「別にそんなつもりじゃねえよ。お前達は可愛いつての」  
最後の一言は感情なしで。

「もう……、はじめちゃんは一」  
「栗、最後の一言大根役者でもそうそう無い棒読みだったわよ」  
月之瀬は頬を染めて、御堂はふう、と溜息をついた。

「まったく、女心をもてあそぶ奴を引き取ったつもりは無いぜ？」  
また、俺の部屋を開けて入ってくる人が。

「飯、あまってるかー」

「そう思って作ってありますよ」

月之瀬がもう一セット分の朝食を台所からとってくる。

この人はアパート『語草』の大家さんである、野々村悠のむら 悠かさん。

背が高くて（180cm以上）、肩より少し長い、カラスの濡れ羽のような黒い髪をポニーテールでくくっている。

俺には両親がいない。

どうやって死んだのすら知らない。

というか、何か大切なことを忘れているのだ。

孤児院にもいたのだが馴染めず、そういう複雑な事情を抱えていた俺を拾ってくれた人が、野々村さんだ。

月之瀬や御堂、臙火にもこういう事情があるんだろう。

ここに来た時はみんな人との接触を避けようとするのだが、大家さんの大雑把でおおらかな心に触れるうちにみんな心を開いていく。

俺はここに小5の時に来た。

ここで一番の古株は月之瀬。俺は二番目になる。

月之瀬の明るさにも支えられて、俺も普通の思考が出来るようになっていく。

はずだ。

俺の次に隴火、最後に御堂だ。

大家さんは俺達に住む場所と食べ物してくれるかわりに、料理を作ってくれと頼んできている。

俺達にとってこの人は命の恩人に近いかもしれない。

死んでいたような生活を繰り返していたあの頃から、ここへと連れて来てくれた。

「あ、大家さんも一緒にどうですか？ クリスマス」

「いいの？ じゃんじゃん食うわよ、私。たらふく美味しいもの作って待ってなさい」

そう言い終わる頃には、大家さんの前からほとんどの朝食がなくなっていた。

「相変わらずめちやくちやに食べるのが早いですね……。じゃ、俺達ぼちぼち学校に出ますよ」

俺もさっさと着替えて、学校の準備をする。

これが、いつもの日常だった。

変わらない日常。(前書き)

第二話。

でもまだまだ話は進みません。

変わらない日常。

俺達は朝食をとった後、高校に行く。

「もうすぐ冬休みにも入るな」

臙火がとりとめも無い話を始めた。

「どうせ『語草』で年末年始過ごすだろうが」

これは事実。

帰る実家も無いから年末年始を紅白とか特番とかみて潰すだけだ。

「ほら、ちゃんと学校は最後まで気を抜かないの！！」  
雫に怒られる。

俺達は市立雪白高校に通っている。

何の変哲も無い、普通の高校だ。

天蓮市の普通の学生は大抵ここに通っている。

歴史も普通の学校と同じくらい、70年程度だ。この市が出来たと同時くらいに出来たらしい。意外にこの市も由緒正しい。

「眠い」

「それくらい我慢しなさい、はじめちゃん」

昼休み、何の気なしにボソツと言った一言に雫が反応した。

もうすぐ冬休みからか、学校の授業にも身が入らない。  
寒いし。

「そうそう、はじめちゃん。聞いた？」

「何のことか分からないのに聞いてるわけないだろ」

「最近この辺で切り裂き魔が出るんだって」

「切り裂き魔？」

こんな普通の町で切り裂き魔ねえ。

とんだ酔狂もいたもんだ。

雫の話だと、時間帯も対象もばらばらしい。

「だから注意してね!!!」

「それ注意しようが無いと思うんだが……」

どうみたってエンカウトした瞬間DEADENDだろ。

「はじめちゃんのことだから、怪しげな人にもほいほいついていくんじゃないの？」

「それはねえよ!!!」

人を何だと思ってるんだ、まったく。

「つか、それをいうならお前のほうだろ。馬鹿だし」

「何だとー!!! 最後の一言は聞き捨てならないよ!!!」

この頃は、こんな普通の日常がずっと続くと思っていた。

物語じゃあ端折はしよられるような日常。

こういつ時間が、一番楽しかった。

そのままこの日は何事も無く家に帰った。

また四人と野々村さんが集まって俺の部屋で食事をした後、テレビをつけるとちょうど切り裂き魔のニュースをしていた。

殺された人の共通点こそ無いが、その殺し方には共通点があるらしい。

鋭い刃物での一刀両断。

それも日本刀レベルの鋭さで、達人のように一太刀で切り捨てているそうだ。

それだけの切り傷を生むような刃物なら、すぐに犯人は見つかるはずなのに、未だに捕まえられていないのは何故なのか、ということが話されていた。

「これは……」

御堂はそのニュースを深刻な顔で見ている。

「物騒だよな、この辺も。そんな奴が出てきたらこの私が一喝してやんよ」

御堂の心配そうな顔を見て、野々村さんが殴るような動作をする。

「ハハツ。そりゃいいな」  
隴火が笑ってあわせる。

野々村さんは古武術の達人だ。

どこで学んだのかは知らないが、毎日練習を欠かさない。

「でも刺激とかしちや駄目ですよー」

「まったく、馬鹿共……」

隴と御堂がたしなめた。

その後、ある程度散髪屋みたいなどうでも良い話をして、皆が自分の部屋に戻った。

そうして、独りになった部屋で思う。

皆、切り裂き魔に恐怖しながらも、絶対に自分が襲われな  
いと思ってる。

かく言う俺もそうだ。

人生でそんな小説チックなことは、もう起きないと思っている。

平凡に暮らして平凡に就職して平凡に結婚して平凡に子供が出来  
て平凡に往生する。

すでに数奇な運命は辿ってきた。

……そう、思っていた。

いまだ、俺は。

いや、俺達は。

数奇な運命の中にいるということに、気がついていないだけだったんだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7509z/>

---

Story of My Life.

2011年12月26日00時59分発行